# Vol.83　オルタード・テンションを絡めたソロの基礎知識　～その 1～

では、『10 分トレ』vol.83、始めていきましょう。

今回は、以前取り組んだディミニッシュや、別途配布している【教科書】の後半の方で解説している、特殊なスケールを使うための基礎をやっていきましょう。

まず、ジャズっぽいものに手を出したり、スケール等を色々学んでいるとその内出会うものに、「オルタード・スケール(オルタード・ドミナント・スケール)」と言うものがありますね。

このスケールの使い方云々はとりあえず置いておくとして、同時に、重要な要素として出てくるのが、「オルタード・テンション」です。

「オルタード・テンション」とは、まず「ナチュラル・テンション」として、
「♮9th、11th、13th」があり、それらを変化させたものとして
「♭9th、♯9th、♯11th、♭13th」にあたる音を指します。

そしてこれらの音は、鳴らすと強い不安定感を醸し出すので、トニックコードへの解決を促すわけですね。

オルタード・スケールだったり、ディミニッシュ、コンディミ、ホール・トーンなどの特殊なスケールは、このオルタード・テンションを含むスケールのバリエーションとして選択されている面もあるでしょう。

で、こう言ったスケール群(とそこから成り立つコード・ヴォイシング)を理解する為の基礎を今回は学ぶ、と。

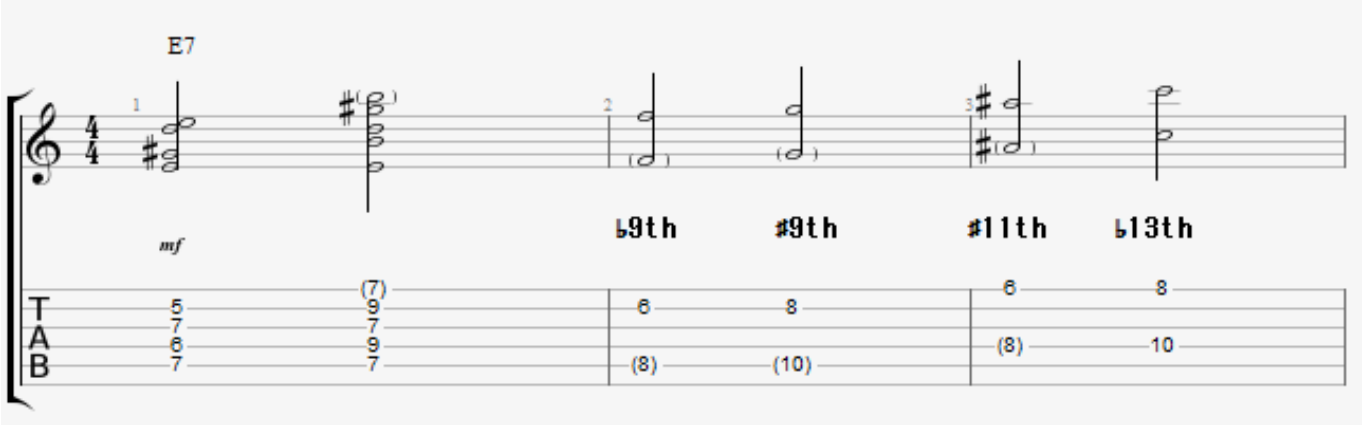
では例題ですが、オルタード・テンションを使う主要な場面としては、「ドミナント 7th(X7)コードの上」があるので、それを例に見ていきましょう。

キーとコード進行は、最近やっていた key=Am のドミナント・モーション、E7→Am7 を使います。

この場合、E7 の上でフレーズを弾く時、先に挙げた様なスケール群から何かしらを選択する事になるのですが、まずは E7 のヴォイシングを基本に、大まかにオルタード・テンションの位置を確認してみます。

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

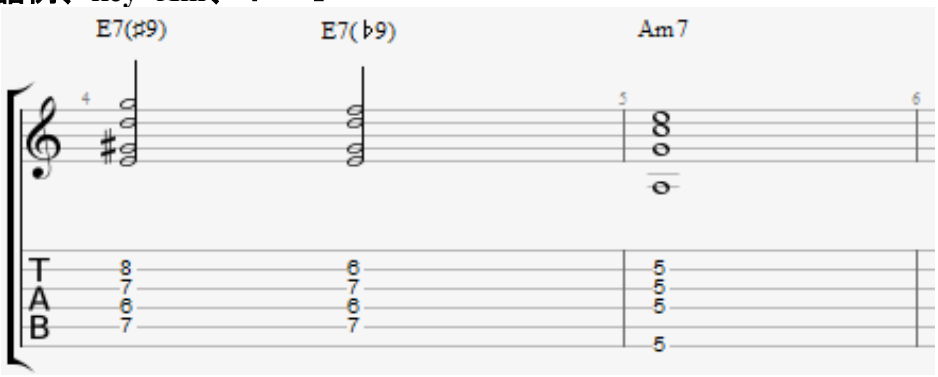
**譜例、E7 の基本ヴォイシングと、そこから見たオルタード・テンションの位置**




(※オルタード・テンション側のカッコ内の音はオクターブ違いです)

で、フレーズとしては、これらのオルタード・テンションがトニックコードに解決する様な流れを作れば良いわけですね。

**譜例、key=Am、Ⅴ－Ⅰ**




見ての通り、オルタード・テンションがトニックコードのコード・トーンへ解決しています。(※ここでは、最終的に E7 上の♭9th(F 音)が、Am7 の P5th(E 音)へ解決)

これはかなりシンプルな例ですが、先の特殊なスケール群を使用する場合、大きくはこう言った流れを作り出すことになるわけです。

今回は、これを参考に、E7 上でオルタード・テンションを鳴らし、その後トニックコード(今は Am7)のコード・トーンに解決するフレーズを作ってみて下さい。

こういった動きがそもそもの基本になりますので。

では、今回は以上になります。

ありがとうございました。

大沼

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved 